

本年のまとめと来年への希望 その5

400号にたどり着きました。こうなると450では中途半端なので、500を目指してまいります。

今に至って、中村雄二郎の「哲学の現在」を読み込んでおります。この文章の冒頭の部分を何度も読み返し、今年の自分を振り返る一助としております。

生きること考えること

この世に生まれてきたものとして、私達は誰でも、生涯を生きなければならない。境遇や環境や条件はちがっていても、みな自分の一生を生きなければならない。生まれてきた以上、死ぬまで生きなければならない。生まれてきたのは自分の意志でなくとも、生きるのは自分が生きなければならない。これは不合理でも、認めなければならない出発点だろう。

また、私たちは、生きていくうえでなにも思わず、なにも考えないわけにはいかない。まだ幼かったり、あるいはただ漠然と生きたり、何かに心を奪われて夢中に生きたりして、特にものを考えないで過ごす時期もあるだろう。

しかし、そういう時期があっても、それがいつまでも続くわけではないし、それに、特にものを考えていなかったように思われた時期でも、あとでふりかえてみると、そのときどきに断片的に多くのことを感じ、思っていたことに気がつくものだ。無念無想ということばもあるが、これは思慮や整った考え方に欠けていることを、でなければ私心や妄念を去った状態をいうのであって、なにも考えないということではない。

だから、あらためて思索とか思考とかいわずに、思い、考えるということを広くとれば、職業や境遇の区別なく私たちの一人一人にとって、思い、考えることと生きることは、ほとんど切りはなすことができない。人間として生きるかぎり、思い、考えることは生きることの一部であり、人間として生きている活動そのものであるとさえいえる。

このように生きることと考えることが不可分であってみれば、私たちはほとんど、よく考えることなしには、よく生きることもありえない。およそ考えるのは頭であり、生きるのはからだである、などと思ってはならないだろう。のちに示すように、実際はそういうふうにはなっていないのである。

また、よく考えるとか、よく生きるとかいうのは、なにも周囲の環境や状況に適應してただうまく考えること、巧みに生きることではないだろう。適應することも、ときには大事である。まったく適應を欠けば生存できないのだから、適應することもよく生きるための条件ではある。しかし、それ以上のものではない。

(以下明日に続く。)

